

浴 槽

NOIF
project

vol.7

海辺沿いをあなたと歩く。海が見たいとわたしが言うと、あなたは渋ることなく車を走らせてくれた。あなたはいつだって、優しい人。カーラジオの隣でしゅわしゅわと弾けていたサイダーは、車を降りるところにはつまらない甘ったるいだけの液体に変わっていた。

一歩前を歩いていたあなたが立ち止まってわたしを見るから、思わず唇をすぼめたら、ほどけてるよと笑ってわたしの靴を指差す。

僕が結び直してあげるから動かないで。すかさずしゃがみ込んだまではよかったけれど、靴紐はなかなか上手に結ばれない。ふだん自分でやるのと勝手が違うからだよなんて、潮風に湿った耳を真っ赤に言い訳をする。

あんまりあなたが一生懸命だから、わたしは息を吐くことさえ躊躇われて、波がすぐそこまで迫ってきていることにも口を噤んだままにした。

しゃがみ込んだあなたのズボンのお尻と、やっぱり靴紐のほどけたままのわたしの靴を瞬く間に波が呑む。

わっと驚いて尻もちをつくあなたに、不謹慎にもわたしは声を立てて笑ってしまう。

さびしい海で泳いでいると、女の子が砂浜を一人で歩いているが見えた。うろうろと、砂を足でいじってみたり波間を覗きこんだりしている。

僕はもう少し泳いでいたかったけれど、陸に上がって聞いてみた。

「何か探しているの？」

海水が耳に入ってしまったのだろう、自分の声がかくぐもっている。

「時計を失くしてしまったの」

女の子の時計は見つからなかった。僕たちは、夕日が沈むのを眺めてから、さよならした。

翌朝になっても、耳の水は抜けていなかった。こんなことは初めてだ。僕は潜水は下手だけれど、耳抜きは得意なのだ。

耳の中で水がぴちゃんぴちゃんと小さく波打つのがわかる。どうにも煩わしいので、ベッドから起き上がることができない。目を開けていることもできず、かといって眠るでもなく、耳の中の水のことばかりを気にしていた。

そうしているうちに、ぴちゃんぴちゃんが、チクタク、になった。

もう一度、海に行ったら女の子に逢えるだろうか。

あの子ならきっと、僕の耳の中の時計を取り出せるはずだ。

瓶が一本、波に揺れている。

浜辺に打ち上げられそうになりながら、しかし完全に打ち上げられることはなく、また返す波にさらわれて海に戻る。

瓶は、長い時間そうしている。

瓶は酒瓶だった。男か女が酒を飲む。瓶は小さな島の酒造場で洗浄され、また酒を詰められ、大陸に船で運ばれて、また女か男が酒を飲んだ。

そんなことを長い間繰り返していた。仲間と比べても、ずいぶん丈夫な瓶だった。

ある時、なぜか船から落っこちた。コルクが朽ちて、酒は海に流れた。それ以来ずっとこうして砂浜の前を漂っている。

寄せては返す波と共に、行ったり来たりするのは、酒瓶であった頃とたいして変わらない。

だが、世の中は静かになった。酒場も酒造場も人間の声が響いていた。海は荒れても、酒場のように五月蠅くはない。

その日、地上に初上陸したイクチオステガが目にしたのは、コンクリートの欠片ばかりが転がる荒涼とした風景だった。灰色の瓦礫の隙間に隠れるようにして、アーケオプテリスの葉が、気弱そうにさわさわ揺れている。

つい今しがた、自らが這い出てきた側溝を振り返る。

「おい、今回は何だかぱっとしない世界だぜ」

ゆらゆらとぬかるんだ水を泳いでいるパンデリクティスにそう教えてやる。残念なネタバレを聞かされたパンデリクティスは、露骨なうんざり顔をした。

うんざりしているのは、それを告げたイクチオステガ自身も同様だった。

改めて第二周目の世界を値踏みしようとする彼の眼前を、一匹の原始昆虫がケケケと笑いながら通り過ぎる。

アクアマリンのピンキーリングは、湯船に入るとするりと小指から抜けてしまう。何度も拾い上げて嵌め直すのだが、すぐにまたするりと抜ける。普段はちょっときついくらいなのに。

ゆらゆら沈んでいっているようにしか思えないのだけれども、どうやら泳いでいるつもりらしい。

ある時、沈んだまま放っておいたら、薄青い石はゼリーのようにぷるんぷるんと震えだした。いい気味だったけれど、あんまり苦しそうで、そのまま溶けてしまいそうだったから、拾い上げた。

ずいぶん懲りたようで、その後は風呂に入っても指から抜けることはなくなった。

盲目少女は七歳のときに光を失った。菌が眼球をすっかり虫食いにしてしまったのだ。痛みはなかった。

涙と思っていたものは融けたガラス体だった。ねえおかあさん、と母親の方を向き直ったとき母親はすぐには助けてくれなかった。母親の息を呑む音で理由が判ってしまった。哀しかった。そのときにはもう何も視えなかったけれど、窪んだ目の穴に残った水溜りみたいなガラス体に夕陽が反射して、きらきらと、ちくちくと、とおい昔に両親に連れられて行った岩場の浅瀬をぼんやりと思い出すのだった。

岩場の浅瀬。バケツいっぱいにあさりとざりがにと綺麗な石を拾った。波の音なんて少しもしなくて、びよおうびよおうと風が吹くばかりで、見上げた父の顔は夕陽の陰影に隠れていたけれど微笑んでいたのは確かだった。

――、おいで！

母親に呼ばれて盲目少女は浅瀬に足を入れ脛まで濡らす。水はひんやりと冷たかったがすぐに肌に馴染んだ。ビーチサンダルは水の抵抗で重く、磯の香りは一層強くなる。ようやく辿り着き、私を抱き上げた母が見せてくれたのは水平線ぎりぎりを横切るタンカー。いつまでも横切り続けていた――。

鍋が泡を吹く。夕飯はあさりの味噌汁だ。

ねえおかあさん。

おかあさん。

いつまでも、ずっと、盲目少女は母親を呼んでいたような気がする。

深夜、胸騒ぎがして寝つかれず夜の散歩に出る。ぽつぽつというような音がして雨が降ってきたのかと案じ、しかしよく聞けばそれは誰かの泣き声のようだ。辺りを見回してみても人っ子一人居ないのにいったいぜんたい誰が泣いているのだろうと思えば、それはマンホールなのだった。私の足下のマンホールが静かな泣き声を上げている。踏んでしまったことに気がつかないでいたせいかと思ってそろそろと足をどかしてみたがいっこうに泣き止まない。それで私はちょっとしんみりしてしまって、マンホールに泣いているわけを訊ねてみた。

可哀相な女の子のために私は泣いているのです、とマンホールは存外にはっきりとした口調で言った。女の子は今、私の下を流れる下水とともに川に向かっています。殺されて捨てられた可哀相な女の子です。

私はマンホールの蓋を開けようと試みたが、マンホールは固く閉ざされていて開かないのだった。どうにか開けることが出来ないかとマンホールに訊ねても、マンホールはただ雨音みたいな声で泣くばかりだった。私はとにかくどうにかしてマンホールの蓋を開けるか、それとも近くの川に走るべきかを考え、考えているうちに自宅の蒲団のなかで朝を迎えていた。

いそいそとポストにゆき、届けられたばかりの新聞をくまなく読んでみたが、殺されて捨てられた可哀相な女の子が発見されたという記事はどこにもなかった。だからあれはきっとマンホールの見た夢だったのだろうと私は安堵し、新聞を抛って朝の珈琲を淹れる準備を始めた。

橋から川面を見下ろす。

世界の汚穢全てを溶かし込んだような真っ黒な水が、瘴気のアブクを吐き出しつつ、流れるともなく澱んでいる。その水面には廃油が膜を張り、夏の日差しをぎらりと七色に反射していた。

暑くなると、このドブ川の悪臭は一層堪え難くなる。工業排水と残飯と排泄物と、使用済みの避妊具から零れた内容物と、どこからか流れてくる猫の胎児とがどろどろに混じり合い、醗酵していく臭い。私は、うえっとえずいた口元を抑えながら、一気に橋の向こうまで走り抜けようとした。

と、その時、一人の婦人が、橋の向こうからこちらに歩いてくるのが見えた。日傘を差した着物姿が、陽炎にゆらゆらと揺れている。落ち着いた銀鼠色の着物を纏ったその人は、胸に藤色の風呂敷包みを抱いていた。熱気と悪臭で停滞しきったこの世界にあって、その風呂敷の色合いだけが、カーンと冴え渡っている。

このドブ川が象徴しているように、ここら一帯は、決してガラの良い場所ではない。こんな良家の妻女風の女性など、場違いも甚だしくて、思わず立ち止まって無遠慮に眺めてしまった。ぞっぴりと下着まで汗みずくになっている自分と、日傘の下で涼し気な顔をしているその上品な女性――両者が、不潔極まりない川風に吹かれながら、今まさに擦れ違おうとしているのが、何だかちぐはぐで、現実味を欠いた光景のような気がした。

もし、ここで……。

ぶくりと、川面に浮かぶアブクがはじける。

もし、ここで、私がこの人を思い切り突き飛ばし、川の中に叩きこんだとしたら、どうなるだろう……。

まるで天啓のように、突如として、そんな嗜虐的な妄想が私の全身を駆け巡った。

高級そうな着物が、たちまちドブ泥に濡れ、そこかしこに汚い染みをつくる。訳のわからない驚愕と不快感で、醜く歪む顔。先ほどまでの涼し気な面影はどこにもない。あの大事そうに抱えていた風呂敷包みは高級な進物だろうか。それがずぶずぶと、黒い泥濁に飲み込まれていく。慌てて拾い上げようとしても、もう遅い。全身を汚泥に濡らし、川底にへなへなど座り込みながら、その人はきっと、童女のように泣くのだろう。

何だか、下腹部から、ぞわぞわとした感触が立ち上ってくる。性的感覚に酷似して、それよりもずっと熱くて重い感触だった。太陽は一層高くなり、ドブ川に浮かぶ廃油をぎらぎらと輝かせている。

その時、天から地へ、息を呑むほど綺麗な藤色が、すうっと落下していくのが視界の端に見えた。

ぼちゃり。重く粘ついた水音が大きく鳴り響き、突如として私は我に返る。

視界が一変している。

いつの間にか、私は橋の下に居て、その身を川の水に浸らせていた。先ほどまでのぞわぞわは、あれは日差しで熱された汚泥が、下半身に纏わり付く感触だった。

「あら、大変。落としてしまったわ」

声が降ってきた方を見上げると、あの人が橋の上からこちらを見下ろしている。その表情は逆光で見えないが、きっと赤い唇をきゅうっと吊り上げ、涼しげな微笑を浮かべていることだろう。

「ねえ、そこのあなた、拾ってくださらないかしら。それは大事な――」

そのほっそりとした指が指し示す先では、あの藤色の風呂敷包みが、今まさに汚泥の中に飲み込まれようとしていた。

「とても大事な品物なんですよ。これから、■■■■■■■■■■までお届けしないとイケないのに、これでは叱られてしまいます。ねえ、拾ってくださらないかしら」

戯れ歌を歌うような軽薄な声色なのに、何故だか圧迫感にも似た強制力を感じてしまう。私は慌てて泥を掻き分け、その風呂敷包みが浮かんでいる辺りまで辿り着こうとするが、その瀟洒な藤色の物体は、すんでのところ泥濘に没してしまった。

「あらあら、すっかり沈んでしまいましたわ。川はこんなに真っ暗々なんですよ、きっともう、あなたでは見つけることなんてできやしないでしょうね」

相変わらず切迫性が微塵も感じられない、小馬鹿にしたような口調――。

それなのに、私は罪悪感と無力感に苛まれたまま面を上げることさえできず、ただ消え入りそうな声で「すみません……」と呟く他はできなかった。

「いいんですよ、いいんです。あとは私が探しますから」

えっと思って、橋の上を見上げる。欄干まで登ったあの人が、着物の裾を捲り上げつつ、まるで競泳選手さながらに、こちらに向けて飛び込みの姿勢を作っているのが見えた。その顔はやっぱり逆光で見えないが、きっと相変わらず涼し気な表情のままなんだろうなど、そんな気がした。

幼い頃のある夏の日。十歳になったばかりのAちゃんに手を引かれて遊びに出た。

「Sちゃんも仲間に入れたげる」

振り返ったその顔は逆光でよく見えなかったが、麦わら帽の輪郭だけは鮮やかだった。彼女に選ばれたということが嬉しかった。

青臭い茂みのトンネルを抜けると小さな池のほとりに出た。だがそこに辿り着くまでに僕は全身を蚊に刺されてしまい、体中が痛痒かった。びいびいと声を上げて泣いた。すると彼女は、しょうがないなあ、と言って池に腕を突っ込んだ。引き抜いた手には液体の虫刺され薬。滴る水は空色のワンピースの裾で拭った。Aちゃんは、僕の腕や手の甲、ふくらはぎに薬を塗りたいくる。それはひんやりとしてとても気持ち良かった。

「他に痒いところはない？」

問いかけながらAちゃんは太腿の内側をいやに丹念になぞる。垂れた薬が靴下を濡らしてしまうほどに。

蝉の鳴き声、陽炎が立つほどの熱気、入道雲、廃屋の影、太腿の奥がじんじんと痺れる――そうしてぼうっとしていると、いつの間にかズボンが脱がされようとしていることに気付いた。あっ、と声を上げると彼女は手を止めることなくこう言った。

「おしっこしてるところ見せてよ」

「嫌だよ」

「じゃあSちゃんは置いてけぼりだね。あーあ、帰れないね」けらけらと笑う。

僕は下唇を噛みながら渋々茂みに向かっておちんちんを突き出した。横から覗き込むAちゃんがぱっと目を見開いた。ぱたぱたと草葉を叩く音が絶え間ない。

ようやくおしっこし終わると、Aちゃんは「私も見せてあげる」とパンツを脱ぎ始める。そしてその場にうずくまり、はあ、と息を漏らした。濡れゆく地面。僕はじっと見下ろしていた。息を呑む。赤いサンダルがおしっこの水たまりに沈んでいく。股間が熱を帯びていく。Aちゃんがズボンの膨らみを撫でる。背筋が震えた。

それから長い間、僕たちはお互いの股間をがむしゃらにいじり合った。最後にAちゃんは自分の手のひらを嗅ぐと「手え臭あい」と顔をしかめて笑った。夕陽のせいでとても眩しかった。

二人並んで池で手を洗う。ずっと気付かなかったのだが、池には色々なものが沈んでいた。ビー玉、バービー人形、プラスチックの髪留め、スプーンやフォーク、色鉛筆、自転車の補助輪、小学一年生用のさんすうの教科書。それらは池の輪郭に沿って整然と並べられていた。まるで棚に飾るように。そしてその一角に、自分と同年くらいの男の子がちょこんと正座しており、虚ろな視線をこちらによこしていた。時折、ぱちくりぱちくりと瞬きをするのだから、どれだけ人形然としていても人形ではありえない。

「アレは私のお兄ちゃん」

立ち上がる間際、Aちゃんは虫刺され薬を池に戻した。

「さ、帰ろう」

手を繋いで歩く帰り道、僕は考える。彼は彼の妹の嬌声を聞いていたのだろうか。一体どんな気持ちで？ それについて考えると愉快になっていくのは不思議なことだった。

浴槽にいつまでも浸かっている。僕とのセックスが長時間に及んだときや、あらゆる物事に関して僕が要求しすぎたとき、たびたび彼女はそうだった。そのときの彼女は四肢にまるで力が入っていないくて、何だか死んでしまったみたいに見える。話しかけても物憂げに頭を振る。

あなたはわたしを重くする、と彼女は言う。重すぎて息が苦しくなる。だからときどき体のなかから流してしまわなくちゃいけないの。

それは流せるものなの。あなたのは幸いにね。人によって違うの。それはもちろん。何だか、僕が薄情みたいな気分だな。違う、あなたのはとても重いのだ。

浴槽のなかで彼女の長い髪の毛と縮れた叢が漂っている。水分を含みすぎて皮膚がぶよぶよになるのではないかと心配になるくらい長いあいだ彼女は浴槽に浸かり、それからゆっくりと栓を抜く。

そのときの彼女はもう全然物憂げではなくて、まるで憑き物が落ちたみたいに上機嫌になっているものだから、僕はそれ以上何も訊けなくなってしまう。ただ、浴槽から渦を巻いて流れてゆく水を眺めていると、無性に胸が切なくなるのだ。

浴槽

<http://p.booklog.jp/book/48480>

著者 : NOIFproject

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/noifproj/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48480>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48480>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.